

# 「情神（ココロド）」考

山口 佳 紀

## はじめに

上代語の研究は、資料とすべき文献が質的にも量的にもきわめて限られているという点に、その学的性格の大部分が規定されているといったら、言い過ぎであろうか。少なくとも、その資料的制約が、後代の言語にまして、上代語の解明を甚だしく困難なものとしているということは、むしろ常識的であろう。

このような資料的困難を克服することは、勿論、容易でない。たとえば、語考証にしても、考察の対象とする語の用例が、上代文献においてただ一例しか見出だせないというようなことも、決して珍しいことではない。しかし、それだけに、個々の事項を孤立的に詮索するのではなく、当代の言語全体に対する体系的把握の下に考察を進めることが、一層望ましく思われる。

以下は、万葉集に現れるココロドという語の解釈を中心に、上代語の体系の一端に触れようとするものである。

まず、順序として、ココロなる語の用例を列挙することにした。

- A 1 出で立たむ力を無みと隠り居て君に恋ふるにこころど(許己呂度)もなし(万一七・三九七二)
- A 2 ねもころに片思ひすれかこのころの吾がこころど(情利)の生けるともなき(万一一・二五二五)
- A 3 独り寝る夜を数へむと思へども恋の茂きにこころど(情利)もなし(万一三・三二七五)
- A 4 妹を見ず越の国へに年経れば吾がこころど(情度)の和ぐる日もなし(万一九・四一七三)
- A 5 家離りいます吾妹を停めかね山隠しつれこころど(情神)もなし(万三・四七二)
- A 6 遠長く仕へむもの思へりし君しまさねばこころど(心神)もなし(万三・四五七)
- A 7 山菅の止まずて君を思へかも吾がこころど(心神)のこのころは無き(万一二・三〇五五)
- 以上がココロドの用例とおぼしきものの全てであるが、これによく似た語にトゴコロというのがある。
- B 1 朝夕に音のみし泣けば焼き太刀のとごころ(刀其己呂)も吾は思ひかねつも(万二〇・四四七九)
- B 2 いで何かここだ甚だとごころ(利心)の失するまで思ふ恋ゆゑにこそ(万一一・二四〇〇)
- B 3 聞きしより物を思へば我が胸は破れて摧けてとごころ(鋒心)も無し(万一二・二八九四)
- もっとも、さきのA 5・A 6・A 7は、ココロドの表記であると断定するにはなお問題があり、トゴコロの表記ではないかと疑う余地もなくはないが、それはまた後で考えることにする。
- さて、このココロド・トゴコロの両語について、従来もっとも一般的な説は、ココロはいうまでもなく「心」であるが、トは形容詞トシ(利)の語幹で、いずれも「しっかりした心」の意であるとするのである。

ところで、実は、もう一つこれらの語と関係があると考えられている言い方に、生ケルトモナシというのがあり、次がその例とされる。

C 1 衾路すさまちを引出の山に妹を置きて山路思ふに生刀毛無(万二・二二六)

C 2 天離あまぢかる夷ひなの荒野に君を置きて思ひつゝあれば生刀毛無(万二・二二七)

C 3 ねもころに片思ひすれかこのころの吾がころど(情利)の生戸装名寸(万一一・二五二五)

C 4 衾道すさまちを引手の山に妹を置きて山路を行けば生跡毛無(万二・二二二)

C 5 忘れ草吾が紐につく時となく思ひわたれば生跡文奈思(万二二・三〇六〇)

C 6 空蟬の目を繁み途はずして年の経ぬれば生跡文奈思(万二二・三二〇七)

C 7 まそ鏡手に取り持ちて見れど飽かぬ君に遅れて生跡文無(万二二・三一八五)

C 8 白玉の見が欲し君を見ず久に夷ひなにし居れば伊家流等毛奈之(万一九・四一七〇)

C 9 深海松よかみの見まく欲しけどなのりその己おのが名惜しみ間使も遣らずて吾は生友奈重二(万六・九四六)

ただ、問題は、C 1~C 3はトが甲類で表記されているのに対し、C 4~C 9ではトが乙類に表記されていることである。

これについての考え方は、大体次の三とおりになるであろう。

(1) トは全て助詞トであって、乙類表記が当然であり、甲類表記は甲乙の混同と見るべきである。したがって、全てイケルトモナシと訓む。

(2) トは全てトゴコロ・ココロドのトであって、甲類表記が当然であり、乙類表記は甲乙の混同と見るべきである。したがって、全てイケルトモナシと訓む。

(3) この場合、トにはもともと二類あって、トが甲類の時はイケルトモナシ、また乙類の時はイケルトモナシというふうに訓み分けるべきである。

(1)(2)についていえば、確かに、トの甲乙の混同はかなり古くから例があるが、万葉集あたりまでを考えれば、まだトフ(問)・トル(取)・トク(解)・ノリト(祝詞)など数語にかぎられており、一般的な混同という事態には至っていないのであるから、簡単に甲乙の混同として片付けるのは、相当危険である。

(1)について特に問題なのは、全てをイケルトモナシと訓むといっても、C8ではっきりイケルトモナシと訓める仮名書きの例が存在する以上、これについて何らかの解釈が必要となる。

これに関して、森本健吉氏(『万葉集の字訓仮名に就いて』日本文学論叢所収)、およびそれを承けた沢瀉久孝氏(『万葉集注釈』巻第二P458・巻第十九P59)は、トは人麻呂時代にすでに混同が行なわれていたとし、すべてをイケルトモナシと訓むべきだとされる。家持(C8)はイケルトモナシといているが、そのトは乙類であるから、引用のトであることが示されており、イケルトモナシとあるべきをイケルトモナシとしたのは、家持の誤りである。それでは、なぜそのような誤りを犯したかという点、人麻呂などの「生跡毛無」の字面を誤読したのであるかとされたのである。

トの混同がそれほど一般的でないという点は、すでに述べたとおりで、特に助詞トの混同例は認められないのであるが、それよりも疑問なのは、家持の誤読という解釈についてである。というのは、たとえ誤読にせよ、なぜそのような誤読が生じたかという点の説明が、これでは十分とはいえない。なぜならば、もしトは全て引用の助詞であり、イケルトモナシという言い方が本来であったとすれば、それに対して、いかに誤りであれ、イケルトモナシという語法的に理解しにくい言い方を、家持がわざわざ提出する必要は全くないのではないか。むしろ、イケルトモナシとい

う言い方が伝承的にせよ存在したからこそ、家持がそれを踏襲し得たと考えなければなるまい。すなわち、イケルトモナシは、単純な誤解などでは生じ得ない言い方であると思う。

なお、沢瀉氏は、助詞トの混同例として、

如是有乃 カカラムノ 豫知勢 カネシツレト 大御船 オホミツネ 泊之登万里人 トシトノトヨリ 標結麻思乎 シメユツメシ (万二・一五一)

をあげ、「乃」は西本願寺本以下の諸本はこのとおりであるが、代匠記が流布本によって、「刀」の誤りとしたのを支持され、「刀」はト甲であるけれども、意味は助詞ト(乙)であるから、甲乙の混同例であると解されたのである。

しかしながら、古写本にすべて「乃」とあること、トの混同は一般的でないことなどから、右の説は承認しがたい。筆者は、やはり有坂秀世氏(「シル(知)とミル(転)の考」国語と国文学昭和十五年一〇月国語音韻史の研究 増補新版)の説に従って、このままカカラムノと訓み、  
使をやらむ為便之不知久(万一一・二五五二)

吾が舟泊てむ伊蘇乃之良奈久(万一七・三八九二)

などを証例として、知ルがかつてはその作用に関係する心理内容を主語としていたものと考えるべきであると思う。

橋本進吉氏(「切符の切らない方」の解釈」国語法要説所収)も、

思ひ遣る為便乃不知者(万四・七〇七)

の例を併せ指摘して、知ルには古く「わかる」の意があったとされている。

問題は、ノの上が体言でなく、ムという助動詞がきている点で、「絶エムノ心」のような言い方とも少し違っているが、カカラムノは、カカラムコトノコトが省略されたと、簡単に考えてよいのではなからうか。

要するに、右の歌を、助詞トに関する甲乙の混同の証とすることは、可能ではないのである。

次に、全てをイケルトモナシと見る(2)の解釈については、

春日野の浅芽が原に後れ居て時そともなし(時其友無)吾が恋ふらくは(万二・三一九六)

卯の花の咲くとはなし(開登波無)にある人に恋ひやわたらむ片思ひにして(万一〇・一九八九)

などの如く、トハナシ・トモナシの言い方がすでに存在している以上、イケリトモナシという言い方が全然あり得ないかのように扱うのは、武断に過ぎよう。

もっとも、大野透氏(「万葉仮名の研究」P.99)のように全てをイケルトモナシと読んだ上で、しかも、ト甲とト乙では意味が異なるとする説もある。同氏によれば、ト甲(C1~C3)はココロドのトに当り、情意(ことに情)の中枢を意味するのに対して、ト乙(C4~C9)は表記の示すとおり「跡」を意味するのであって、心身(ことに心)における生の形跡、生の現れを意味するものである。

これは、トにおける甲乙の差を合理的に説明しようとしたものであるが、ト乙が「跡」であると仮定する点はまだしもとして、それが「心身における生の形跡」のような意味に使われたと考えるについては、他に証拠もなく、説得力に乏しい。

以上の解釈の難点は、(3)のように考えることによって、解決し得ると思われる。すなわち、イケリトモナシという言い方と、イケルトモナシという言い方とが、共存したと認めるならば、ト乙の場合は、助詞トで、イケリトモナシと訓み、ト甲の場合は、体言トで、イケルトモナシと訓むことになる。ただ、この解釈は、次の二点が問題である。

①ト甲は、体言とした場合、意味は何か、また、トゴコロやココロドのトとどういう関係にあるのか。

②C8では、イケルトモナシとありながら、そのトは乙類となっている。この点、どのように考えるべきか。

従来にも、この(3)のような立場に立つものがあるにはあったが(日本古典文学大系「万葉集一」P118頭注)、右の二点が明確でないために、なお断案となるに至っていない。

二

さて、トゴロ・ココロド・生ケルトモナシのトの性質について考える段階に至った。

従来、いずれも形容詞語幹ト(利)であると説かれることが多かったものである。しかし、もしこのトを形容詞語幹と考えるならば、トゴロのような用法には疑問がないが、ココロドおよび生ケルトモナシのような用法は、きわめて不審である。

形容詞語幹が一種体言的な性格をもち、語幹のみでかなり自由な用いられ方をしたことは、よく知られている。以下、上代文献に見える形容詞語幹の用法を類別して列挙して見る。

- ① 名詞が下接する 赤玉・賢シ女
- ② 動詞が下接する 高行ク・太敷ク
- ③ 形容詞が下接する 遠長シ
- ④ 形容詞語幹+モが下接して連用的になる 遅速モ
- ⑤ ツまたはノが下接して連体的になる 遠ツ人・遅ノ遊士トキナヒ
- ⑥ ニが下接して連用的になる 直ニ・正シニオホキ
- ⑦ イヤヽニ・ヤヤヽニの形で連用的になる イヤ高ニ・ヤヤ大ニオホキ
- ⑧ モが下接して連用的になる 早モ・痛モ

⑨ヤが下接して述語的になる 遅ヤ・モトナヤ

⑩アナが上接して述語的になる アナ醜・アナタツタツシ

⑪名詞が上接する 腰細・根白

⑫反復してシク活用系の形容詞を作る 長長シ・遠遠シ

⑬接頭辞が上接する 真白・夕長

⑭接尾辞が下接する 深シ・悲シブ・細シサ・広ミ

以上は、いわゆる形容詞語幹の諸相を、形式的に分類して見たものであるが、相当地に独立性の強いものであって、単なる語の構成要素というより、それ自体が多分に語性格を有していることがうかがえる。また、ク活用系の語幹の方が、シク活用系の語幹よりも、遙かに活動範囲が広く、語幹の安定度の高いことが示されている。これは、おそらく、ク活用系の語幹の発生の古さを物語るものであろうと思われる。

ただ、忘れてはならないことは、それら形容詞語幹が、全ての用法を通じて、情態的意味を荷っていて、実体的な意味を持つ用法はなく、その点で名詞と同一視できないという点である。

たとえば、後代になると、「赤」「白」など色名は、主格や目的格に立ったりするようになって、実体視され、名詞に転化するのであるが、上代ではまだそのような用法は現れていない。また、「遠ツ人」「遅ノ遊士」などでは、いわゆる格助詞が下接しているから、「遠」や「遅」は実体視されているかの如くであるが、おそらく「遠キ人」「遅キ遊士」という言い方と大して変らないのであって、ツ・ノは上の成分が連体格たることを示すのに過ぎず、「遠」や「遅」の情態的意味は、依然として保存されていると考えられる。

また、「根白」「腰細」なども、一見実体的であるように思われるが、このような例を通覧すると、



根白高草 (万一四・三四九七)

草深野 (万一・四)

葉広ゆつま椿 (記・雄略)

のように名詞を下接するか、または、

腰細ノすがる乙女 (万九・一七三八)

股長ニ寝は寝さむを (記・神代)

のように、ノ・ニが下接しているかであって、いずれも下の語に対して修飾的で、情態性を失っていないのである。⑬のように接頭辞を伴ったものも、同様である。

ちなみにいえば、

飛翔為輕如来腰細丹取筋氷 (万一六・三七九一)

の「如来」を、従来ゴトキと訓み慣わしているが、そこには疑義がある。これはおそらく「腰細」を名詞と見たからであろうが、当時の語法からいえば、「腰細ニ」全体で副詞相当なのであるから、ここはゴトクと訓み改めるべきであろうと考える。

以上、形容詞語幹の性格について、若干の検討を加えた。上代の文献においては、すでに大分用法が固定的になつてはいるものの、まだかなりの独立性を主張している様子が見て取れる。これは、おそらく、もともと形容詞語幹自体が語的存在であったことの現れであろう。そして、その機能は、接辞を伴うことがなくとも、連用的にも、連体的にも、また述語的にも用いられることがあるが、主格や目的格などに立つことはない。これは、形容詞語幹が飽くまでも情態性の成分であったことを示すものである。

## 三

前節の考察に基づけば、ココロド・生ケルトモナシのトに対する従来の解釈の欠陥は、おのずから明らかである。

すなわち、ココロドを「心利」と解するとすれば、「腰細」「草深」などと同じ語構成であることになるが、ココロドは諸例全て主格に立っており、当時の形容詞語幹の基本的性格に合致しないことになる。すなわち、ココロドが「心利」であるかぎり、主格には立ち得ないのである。

そもそも、「腰細」と「細腰」とは、歴然とした意味の差が存する。「細腰」とは「細い腰」という実体であるが、「腰細」とは「腰が細い」という情態である、ココロドを「心利」で、「しっかりした心」の意であるとするのは、右の二類の差を忘れたものであるといつてよい。

また、生ケルトモナシのトを形容詞語幹ト(利)と考えるのも、トが生ケルという連体修飾語を受け、主格に立っている事実からして、上代における形容詞語幹の基本的性格を無視したものである。もつとも、トはトゴコロ(利心)の略形であるとする説き方もあるが、そのような用法も、形容詞語幹の用法としては、他例のないものである。

以上、ココロド・生ケルトモナシのトが形容詞語幹のト(利)であるとする説の妥当でないことを論じた。トゴコロ(利心)については、語構成上の問題はない。一般にココロ(心)の形容として、利シなる表現を当時行なったかどうかは、上代における利シの用例が、さほど豊富でないところから、あまり明らかでないが、あり得ない言い方であるという、積極的な否認の論拠もない。ただ、B1は「焼太刀ノ」を受け、B2は「利」字、B3は「鋒」字を用していることから見て、当代人がトゴコロのトに「鋭利」の意を認めていたと見るのが、適切であろう。したがっ

て、トゴコロについては、従来の解釈を容認してよいと思う。

次に、ココロドについて考えるに、ここにムラト(腎)という語の存在が想起される(観智院本類聚名義抄によればムラドと濁音である)。

かつて、馬淵和夫氏(「万葉集参考古辞書類について」解釈と鑑賞二六卷三号)は、新訳華嚴經音義私記に、

心腎肝肺、心人情也。腎音神、訓牟良斗。肝音干、訓岐毛。肺武反、乾肉薄折之曰肺也。大小腸、波良汗多。

とあるのを引き、従来「群臟腑」の意とされてきたムラギモについて、ムラはムラトと関係ありとして、ムラギモは「腎肝」の意であろうとされた。注目すべき説であると思う。

問題は、ムラのみで「腎」の意を表わせるならば、ムラトのトは何かという点である。そこで、これに語構成のよく似たココロドについて考察する。

ココロという語はもと「心臓」を意味したようである。肝向カフという枕詞がココロにかかるというのも、肝臓と向きあっている心臓というところから出たものであろう。そのココロという語が、「精神」を意味するようになったのは、精神が心臓に宿っているように、古代人が観じたからに相違ない。

もっとも、精神の宿る場所は、必ずしも心臓に限定されるわけではないらしい。ムラギモ(腎肝)ノがココロの枕詞になり得るのは、腎臓や肝臓もまた精神の宿り場所であったことが示されているものと思われる。

ココロがかつて「心臓」の意であったように、ココロドもまた「心臓」を意味したものではなからうか。「心臓」を意味するココロ・ココロド、腎臓を意味するムラ・ムラトとならべてみると、これらト(甲)は、クマト(隈処)・コモリド(隠処)・タチド(立処)・ネド(寝処)・ネヤド(殺屋処)など、「場所」を意味する接尾辞ではないかと考えられる。右の語例の中でも、クマト・ネヤドは、クマ・ネヤのみでも、意味するところはそれほど違わない。すな

わち、心臓はココロともココロドともいうことができ、腎臓はムラともムラトともいい得たことになるのである。

一体、ムラギモを「群臓腑」とする説は、古代日本人が内臓に関する知識に乏しく、したがって語彙も貧弱で、キモが肝臓というより内臓一般を漠然と指示する語であった、というような通念から発したものであろうと思われる。しかしながら、内臓の諸器官に関する区別が曖昧なのはむしろ後代であって、かつてはもう少し正確な知識を有していたであろう。大体、内臓に関する人間の知識は、獸類を食する習慣から生ずるものと思われるが、その点からいえば、少なくとも仏教浸透以前には、日本人にも内臓に関する知識を獲得する機会は相当あったろうし、また、必要でもあったはずなのである。したがって、後代の方がかえって知識が曖昧なのであり、後代の状況から、上代以前の知識内容を類推するのは、あまり上策とはいえないと思う。

上代文献で見ると、少なくとも次のような区別は存したものである。

心臓 ココロ(ココロド)

肝臓 キモ

腎臓 ムラト(ムラ)

肺臓 フクフクシ(新訳華嚴經音義私記)

胆嚢 イ(胆振鉏此云伊浮梨娑陸)〔齊明紀〕

腸 ハラワタ(新訳華嚴經音義私記)

そのようなわけであるから、キモも漠然と内臓を指すのではなく、

わが肉は御脰みたまはやしわがきも(伎毛)も御脰はやしわがみげ(牛・羊・鹿ナドノ胃)は御塩のはやし(万一六・

三八八五)

のキモも、やはり「肝臓」と解すべきものであろう。

また、ココロの原義を「心臓」と考えたが、もしそうでないとすると、「心臓」を指す語が見当らないことになり、内臓の諸器官をかなり識別しているにもかかわらず、もっとも目立つはずの心臓に名称がないことは、きわめて考えにくいことだからである。ただ、ココロの語を「精神」に奪われてしまったために、「心臓」を意味する語がないように見えるのであろう。

結局、ココロドは「心臓」↓「精神」のような過程をたどった語で、ココロとはほとんど同義であると考えられるのであるが、そのように考えて、さきの歌の解釈に支障が生ずるであろうか。従来、ココロドについて「しっかりした心」の意と考えてきたのは、一つには文脈から仮想したものであるが、それ以上に、トがリシの語幹であるという先入観から、演繹的に想定したという趣きがあるのではないだろうか。たとえば、A4の「吾がココロドの和ぐる日も無し」も、従来の説にしたがえば、「しっかりした心が平穩になる日もない」というような、甚だ奇妙な言い方がなされていることになる。「情神」「心神」などと表記されていることからしても、ココロドという語自体に、「鋭利」の意が含まれていたとは思われない。ココロドは、「情」とか「心」とか表記することも不可能ではなかったろうが、それでは単にココロと訓まれてしまう恐れがあったために、「情神」「心神」と表記されたものようである。さきに、「情神」「心神」を、ココロドでなく、トゴコロと訓むことはできないだろうか、という問いを提出したが、トゴコロには「鋭利」の意があると思われるから、単に「情神」「心神」と表記することは、考えにくい。

第三に、生ケルトモナシのト（甲）についてであるが、これは、

真栄葛たとき又はり穴串る熟睡寝しとに（祢矢度你）庭つ鳥鶏は鳴くなり野つ鳥雉は響む（継体紀）

我が宿の松の葉見つつ吾待たむ早帰りませ恋ひ死なぬとに（古非之奈奴刀尔）（万一五・三七四七）

などに見える、「時間」を表わすト(甲)であろうと思う。右のトは、上代文献ではつねにトニの形で現れ、意義もすでに明瞭でないところがあるが、かつては「時間」の意の名詞で、用法ももっと広がったと思われる。して見れば、生ケルトモナシは、「生きている時もない」の意になるのではないかと思う。

C3の「吾がココロドの生ケルトモナキ」について、従来の説の如く、ココロドは「心利」、生ケルトのとも「利心」の「利」であるとすれば、同じような語が重複していることになって、拙劣な印象を免れない。筆者は、右の個所を「私の心は生きている時もない(くらいだ)」というような意味に理解すべきだろうと考える。

ところで、C8はト甲であるべきなのに、実際はト乙で表記されている。これについては、次のように考える。生ケルトモナシという言い方は、かつては原義が正しく理解されていたろうが、次第に慣用化し、家持の時代には、トがどのような性質の語かが、すでに不明になっていたに相違ない。したがって、全体として「生きた心地がしない」ことを意味する慣用句という程度にしか、意識されていなかったのではあるまいか。そのような状況においては、家持がトの甲乙について誤解を生じたとしても無理はないであろう。一方で、生ケルトモナシという言い方が横行していたことも、その誤解を助けたかも知れない。

結論的にいえば、C1~C3およびC8は生ケルトモナシで、「生きている時もない」を原義とし、C4~C7およびC9は生ケルトモナシと訓んで、「生きている状態でない」という意であると思う。少なくとも、そのように考えて、特に不都合とすべき点はないし、他説に比して無理な点が少ないと考える。

#### 四

以上の問題に関連して、次の歌の解釈を検討したい。これは、大伴家持が久邇京から坂上大嬢に贈った五首の中の

一首である。

言間はぬ木すら紫陽花諸弟等之練乃村戸二あざむかえけり(万四・七七三)①

この歌について、日本古典文学大系(万葉集一 P 315頭注)では、ムラトは「腎」であり、ムラキモ(村肝)が心の枕詞となっていて、日本古典文学大系(万葉集一 P 315頭注)では、ムラトは「腎」も「心」を意味し、ネリノムラトは、「よく練られた心、転じて、屈折ある、一筋縄で行かない心」の意であるとしている。これは、目下の論にとって、甚だ都合の良い説のようであるが、直後に置かれた次の歌とともに、難解で、種々問題を含む。

百千度恋ふといふとも諸弟等之練乃言羽者我は頼まじ(万四・七七四)②

さて、「村戸」については、沢瀉久孝氏が「万葉集注釈巻第四」において、これは、ムラへと訓すべきものであって、ウラへ(古へ)に通ずるとされた。また、同書によれば、小島憲之氏は、職員令に見える「酒戸」「鍛戸」と同じく、「占戸」で、「占をする家」があったかとされた由である。

その他、諸説入り乱れた状態であるが、概して、従来の「村戸」の解釈は、直後に置かれた②では、「村戸」に当る部分が「言羽(コトバ)」となっているという点に、あまり注意を払わなかったようである。

ト(甲)には、かつて「言辞」を意味するものが存在したようである。

太諍辞此云布斗能理斗(神代紀・上)

絶妻之誓此云許等度(神代紀・上)

などにおける、ノリト・コトドのトがそれである。もっとも、単なる「言辞」の意というより、武井睦雄氏(『古事記』における「戸」字の用法「私家版」)の説かれる如く、呪的行為を表わす語であったかも知れない。いずれにせよ、「村戸」はムラトと訓むべきもので、トはノリト・コトドなどのトであろう。

ムラの意義は明確でない。ただ、「絶縁の誓言」を意味する語としてコトドが存在したこと、および、①の歌の状況から、想像を逞しくすれば、コトドとは反対に、「結縁の誓言」を指して、ムラトといったのではないかという考えが浮んでくる。そして、ムラ (mura) コト (koto) の対立からは、モロ (moro) 一カタ (kata) の対立が連想される。すなわち、ムラ (結縁) 一コト (絶縁) の対立とは、モロ (阿) 一カタ (片) の対立ではなかったかと思われるのである。敢えていえば、ムラトとはモロ (阿) なる状態を招来する呪言であり、コトドとはカタ (片) なる状態を招来する呪言であったとはいえないだろうか。

次に、「練乃」を従来ネリノと訓じて、「練達の」「巧みな」というような意にとっているが、ネリ (練) にそのような抽象的な意味を想定するのは、上代語としてはいささか無理の感がある。

筆者としては、これをネヤノと訓んで、「寝屋の」の意と考えたらどうかと思う。「練」字についてはまだ確例を見出さないが、それと通ずる「鍊」字には、ネヤスという訓を付した例がある。

鍊の中に、それと通ずる「鍊」字には、ネヤスという訓を付した例がある。  
(西大寺本) 金光明最勝王經平安初期点 (春日政治) (西大寺本) 金光明最勝

王經古点の国語学的研究」本文篇P27)

梵 (紙背) 夜久石鍊 (紙背) 樹夜刻 金 (東大寺図書館蔵法華經義疏紙背訓註平安初期写) (小林芳規) (東大寺図書館蔵) 法華經義

疏紙背訓註」訓点語と訓点資料第十輯)

それ故、「練」字をネヤと訓むことは、不可能ではないと思う。

第三に、「諸弟」であるが、これには「諸茅」とする本文もある。しかし、沢瀉氏が同上書で指摘されたように、「諸兄(モロエ)」「諸姉(モロネ)」という人名も存在することであるから、「諸弟(モロト)」でよからう。ただし、「諸弟」を人名と解すると、いかなる人物を指すのが疑問になる。歌意からいえば、ここは相手の坂上大嬢を指す



とするのが、順当であろう。上代のエ・オトは、必ずしも男性のみでなく、女性をも含み、年上ならばエ、年下ならばオトであった。また、人名である「諸兄」「諸姉」のモロが複数を表しているとは考えにくいから、この場合、モロは「完全」のような意で、賞辞的に用いられているのではないかと思われる。モローカタの対立は、マ(真)ーカタ(片)の対立と同様、完全ー不完全の関係でもあったであろう。以上のことから、モロトとは、本来、年下の男または女に対して、敬意を含んで呼びかける語ではなかったらうか。

最後に、「諸弟等」とあるラは、複数ではあるまい。阪倉篤義氏(「語構成の研究」P315)の指摘されたように、ラは一種の臚化法的表現であって、

見渡しに妹ら(等)は立たしこの方に我は立ちて思ふ空安からなくに嘆く空安からなくに(万一三・三二九九)の歌の「妹ら」は、複数ではあり得ない。

以上の考察に基づけば、①の歌は、

物をいわない木でさえも、紫陽花のように移ろいやすいものがある。(まして人間はあてにならぬはずなのに)あなたなんかの寝屋での固い結びつきを誓うことばにだまされたことだ。

ということになり、②の歌は、

百たび千たび私を恋しているとあなたがいても、あなたなんかの寝屋でのことばはあてにすまい。

という意になろう。つまり、「村戸」を「恋ふといふ」「言羽」にはほほ相当するものと考えて、初めて①と②とが完全に照応するといえるのではないだろうか。結局、①の歌のムラトを「腎」の意より「心」を意味するに至ったものとする説は、古代人が腎臓や肝臓をも精神の宿り場所と考えたらしいとする最前の論に、きわめて好都合ではあるが、右の検討の結果では、その解釈は適切でないように考えられる。

## おわりに

以上、論述の趣くところいささか散漫になったが、従来、ココロド・生ケルトモナシのトが、トゴコロのトと同じく、形容詞トシ(利)の語幹であるとすると説が一般的であったのに対し、形容詞語幹の基本的性格という点から疑いを抱き、検討した結果、トゴコロのトは形容詞語幹のト(利)であると認め得るが、ココロドのトは「場所」を意味するト、生ケルトモナシのトは「時間」を意味するトであると考へるに至った。また、それに関連して、「腎臓」を意味するムラトの外に、ある種の誓言・呪言を意味するムラトの語が存在し、そのトは、ノリト・コトドのトと同じく、呪言の意であろうと推定した。

すでに気付かれていることではあるが、上代語には、一音節の形態素が比較的多い。その結果として、同音異義の形態素が多く生ずることになる。たとえば、右にあげたトなる形態素も、意味からは四種が区別されるが、音韻的にはト(甲)一種である。一方、全体として見れば、上代文献に見える形態素の種類は、さほど多いとはいえない。したがって、それら多からぬ形態素を組み合わせて、別種の単語を生産しているのが、上代語の実情であるといえよう。

そうして見ると、ある一音節形態素は、いくつかの語の構成要素として現れるが、同時に、それと紛れやすい同音の形態素が、共存的に活動していることになる。それ故、ともすれば、同一形態素を別種のものとして認定したり、別種の形態素を同一のそれと錯視したりということが起こりやすい。それを救う道は、上代の言語事実に対する体系的考慮を行なうこと以外にないであろう。

すなわち、上代語における語彙体系の構造、語構成システムの性格、および各形態素の語構成的機能の特質などに對する解明を怠るならば、いわゆる語考証も不十分なものとならざるを得ない。慎重な配慮の望まれる所以である。